

アートプロジェクトについて

※詳細は公式ウェブサイトをご確認ください

※内容は今後変更になる場合があります。

「Giant Micro Plastic」は、私たちの目には見えにくいマイクロプラスチックを、巨大な造形作品として可視化するアートプロジェクトである。

現代社会において、プラスチックごみの問題は深刻化しているが、その中でも特にマイクロプラスチックは、目に見えないがゆえに実感しにくく、議論が後回しになりがちという課題がある。本プロジェクトでは、実際に海岸で採取したマイクロプラスチックをマクロレンズでクローズアップ撮影し、その質感や形状をもとに巨大なペーパークラフト彫刻として再構築する。このプロセスを通じて、微細なプラスチックが持つ意外とも言える美しさや異物感を強調し、鑑賞者に「見えない問題」としてのマイクロプラスチックを再認識してもらうことを目的としている。また、市民参加型の取り組みとして、地元の若者やビーチ清掃ボランティアと協力しながら、マイクロプラスチックの採取やワークショップを実施することで、環境問題への関心を深める機会を生み出すことを想定している。本プロジェクトは、アートと環境教育を融合させ、身近な問題を新たな視点から捉える試みである。

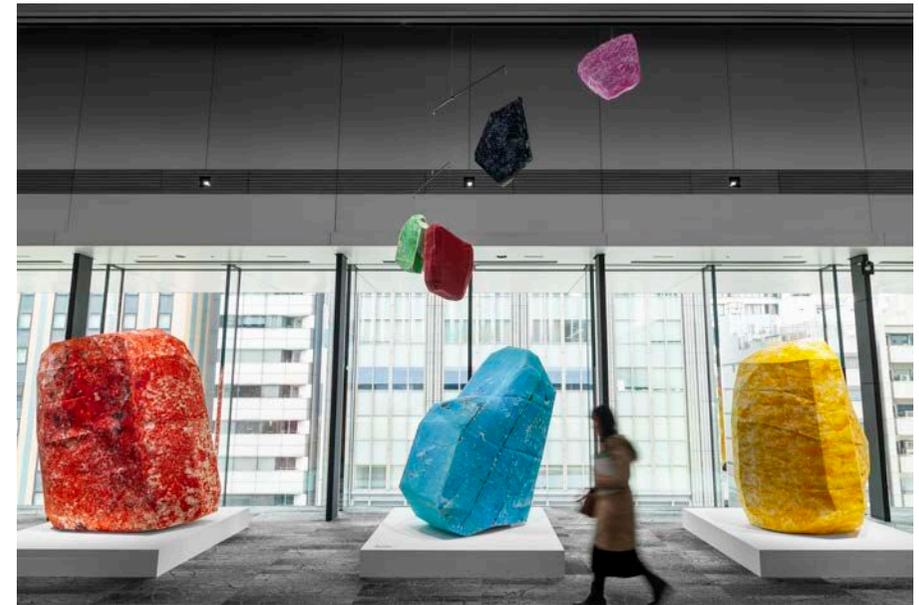
●Profile：安西 剛 Tsuyoshi Anzai

1987年、東京生まれ、千葉在住。

東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科卒業、同大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。プラスチック製の日用品や構造物を用い、人間とモノとの関係や、機能と形態の結びつきの忝意性を問い直す作品を制作している。

主な展覧会に、個展「アペルト12 安西剛『ポリ-』」（金沢21世紀美術館、2020）、グループ展「EXTENDED PRESENT - TRANSIENT REALITIES」（ルートヴィヒ美術館、ブダペスト、2022）など。ポーラ美術振興財団の助成を受け、ベルリンのクンストラーハウス・ベタニエンにて1年間滞在制作（2020-2021）。また、ヒューストン美術館主催のCore Residency Program（2015-2017）に参加。

近年は、マイクロプラスチックを題材とした写真やインスタレーションを通して、素材としてのプラスチックと人間の欲望の関係を再考するプロジェクトに取り組んでいる。富士フィルム主催「GFX Challenge Grant Program 2024」Regional Grant Award 受賞。令和6年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業・国内クリエイター創作支援プログラム選出。現在、東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科にて非常勤講師を務める。



市民参加のかたち

ワークショップ／展示鑑賞

実施エリア・拠点

海浜エリア／稲毛ヨットハーバー、稲毛記念館など

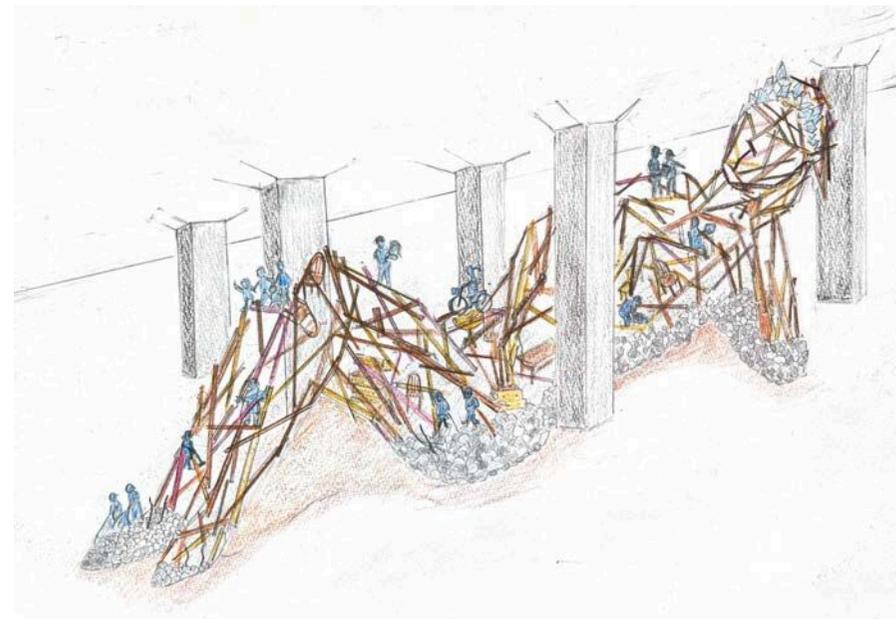
●協力：NPO法人Aqua Dream Project

ガード下に、建築廃材や廃棄家具等によって、全長17mの巨大な女神像を制作する。

高架下に横たわる女神の体には、地域で生活する人々の姿が板絵によって表されていて、全体で大きな女神像をかたち造っている。そして女神が横たわるこの空間を「ガード下神殿」と命名し、近隣の方々の協力を得ながら日常の悩みや希望を訴え祈る場所として設えて行く。

有用—無用。自然—人工。過去—未来。綺麗—汚い。成功—失敗。便利—不便。価値—無価値。意味—無意味。進歩—後退。豊かさ—貧しさ。静寂—喧騒。善意—悪意。条理—不条理など、いつの間にか私達の判断の基準となっている一般社会通念からしばし離れることの出来る、アートのフィールドからの神殿づくりを試みる。

横たわり、人々の生活を眺めながら思考を巡らす女神を中心に、さまざまなモノや概念がごちゃ混ぜに存在する場を「ガード下神殿」と名付けるプロジェクト。



市民参加のかたち

材料提供／ワークショップ参加／制作参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

西千葉エリア／西千葉工作室など

●協力：株式会社マイキー

●Profile：伊東 敏光 Toshimitsu Ito

1959年千葉生まれ。1987東京芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。広島市立大学芸術学部名誉教授。近年は「風景と彫刻」をテーマに、それぞれの場の歴史や風土のリサーチからもたらされるインスピレーションを造形化する試みを続けている。近年の主な展覧会として、2015「LA ART SHOW 2015」ロサンゼルス コンベンションセンター／「アートフェア東京2016」東京国際フォーラム／2016「彫刻-気概と意外」東京芸術大学大学美術館陳列館／2017 個展 KEUMSAN GALLERY（韓国 ソウル市）／2018 個展 FEI ART MUSEUM YOKOHAMA（神奈川県）／2018 平昌文化オリンピックイベント「FIRE ART FESTA 2018 -献火歌-」江陵鏡浦海岸（韓国 江陵市）／「瀬戸内国際芸術祭2016,2019,2022,2025」（香川県小豆島町）等。

1871年に千葉県内で創業し、2014年に閉店した老舗割烹店「うなぎ安田」の元店舗を舞台としたアートプロジェクト。千葉市市場町で10年以上閉じていた歴史ある建造物を、市場町で生まれ育ったクリエイターユニット「岩沢兄弟」が新たな姿でひらいていく。

元厨房の1階は、岩沢兄弟がユニークなものづくりを展開する「キメラ遊物店」として運営。まちから集めた材料置き場・工房・店舗を兼ね、さまざまなモノとモノ、アイデアを組み合わせた「キメラ遊物」が岩沢兄弟とその仲間達によって日々生み出されていく。来場者はものづくりの様子を覗きつつ、ときどき開催されるワークショップに参加したり、材料やキメラ遊物を手に取れる。キメラ遊物店の中に謎店舗「“なんでも公式グッズ”セルフ」が立ち上がり、「芸術祭オフィシャル非公式グッズ」や「ちば公式土産（案）」を制作する予定。

また2階は、千葉国際芸術祭2025のコミュニティセンター「アーツうなぎ」として活用。元割烹店らしい趣きが残る空間で、アートに関するトークイベントや交流会、芸術祭の情報発信が行われる予定である。

●Profile：岩沢兄弟 Iwasawa Bros.

「モノ・コト・ヒトのおもしろたのしい関係」を合言葉に、人や組織の活動の足場となる拠点づくりを手掛けるクリエイターユニットであり、実の兄弟。兄弟ともに千葉県千葉市生まれ。空間・家具などの立体物設計、デジタル・アナログ両方のツールを活用したコミュニケーション設計、企業のオフィス空間からアートプロジェクトの拠点づくりまで幅広いプロジェクトを手掛けている。

【構成メンバー】

いさわひとし（兄）

1974年千葉県生まれ。多摩美術大学建築学科卒業。岩沢兄弟の立体物デザイン担当。空間デザイナー、車輪家具プロデューサー。空間デザインからイノベーション家具、名刺ケースまでなんでもつくる。無類の車輪好き。

いさわたかし（弟）

1978年千葉県生まれ、武蔵野美術大学短期大学部生活デザイン学科卒業。岩沢兄弟のWeb、映像、音響、よろずディレクション担当。趣味は自作楽器の演奏。



撮影 ただ（ゆかい）

市民参加のかたち

ワークショップ参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

市場町・亥鼻エリア／アーツうなぎ

「Tele-Interference Counterpoints (in Chiba)」は、廃棄予定の蛍光灯を千葉市内で回収・整備し、複数台のラジオやスピーカー等を組み合わせて、光と音によるインスタレーションとして「再生」する／させる一連のプロジェクトである。本プロジェクトでは主に、市内各所から蛍光灯を集める「回収フェーズ」と、集めた蛍光灯による明滅する光の展示を行う「展示フェーズ」で構成される。

光と音のゆらぎは懐かしさやペースを想起させる一方、世代によっては新鮮なメディアとしても映る。さまざまな人の印象や想い、そして組み合わせることで変化する時空間を、ふたつのフェーズで多層的に提示していきたい。それまで身近にあった／無くなりつつある蛍光灯を通じて、“もの”と“もの”、“もの”と人、人と地域、消費と循環、記憶と未来をつなぐ美術の役割を、本プロジェクトを通して追究する。

●Profile：上野 悠河 Yuga Uéno

1997年千葉県生まれ、千葉県在住。

現代音楽への関心やオーケストラの打楽器に所属していた経験から、1960～70年代の美術史研究を経て、現代における人間や「もの」の複雑な振る舞い、関係性、有限性に焦点を当てた作品を発表している。美術や音楽に関するほとんどすべての技術を独学で習得した上で、レディ・メイドの道具や機材、その機能を実際に利用し組み合わせたサウンド・アート、インスタレーション・アートを主軸に表現しているほか、ミュージシャン「Mus'c」（ムスク）としても活動。

近年の展示に、個展「独奏・曲・のための・奏者」（あをば荘／東京）、個展「ものたちは、歌い、蔑み、愛し合った」（千葉市民ギャラリー・いなげ/旧神谷傳兵衛稲毛別荘／千葉）、「SICF23 EXHIBITION部門 受賞者展」（スパイラル／東京）、「ZOU-NO-HANA FUTURE SCAPE PROJECT 2022」（象の鼻テラス／横浜）など。

「ClafT（中央線芸術祭）」に2021年から参加・出展。また「SICF23」大巻伸嗣賞、「第二回 ISAC国際作曲コンテスト」Special Prize (Special Mentioned)、「島村楽器 録れコン2022」グランプリなど、展示／受賞多数。



参考作品「Tele-Air Counterpoints (on the port)」2022, 象の鼻テラス／横浜

市民参加のかたち

材料提供／イベント・ワークショップ参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉駅周辺エリア／第一山崎ビル

千葉市の近代化の基礎は、20世紀初頭に「軍都千葉」と呼ばれた、大日本帝国陸軍所属の鉄道連隊を中心とした大規模な軍備施設にあった。軍都として近代の幕があき、20世紀後半に完成した現代的な都市文化を持つ首都圏の都市。当プロジェクト開催予定地はその中心部に位置する二階建ての空き家。この風化した鉄骨とモルタルで出来た和式の引き戸の建造物一棟を使用して、20世紀の痛みと享楽が、戦争と平和が、つながる過去と現在が、多面的に立ち上がる豊かな空間を一般的な工業製品を組み合わせでつくる。

主な展示予定作品：

《ホーミー&ザ・ローテーターズ》 Homy and the Rotators, 2023

《リファビッシュド・タンスロボ》 Refurbished Tansu Robo, 2025

《ロスト・フロンティア/ルートホーム》 Lost Frontier - Route Home, 2025



宇治野宗輝 《ホーミー&ザ・ローテーターズ》2023
 インスタレーション(木、電化製品、楽器用アンプ、ワイパー、ドアミラー、他)サイズ可変 (映像6分20秒)
 撮影：坂本理 Courtesy of ANOMALY

●Profile：宇治野 宗輝 Muneteru Ujino

1964年東京生まれ。東京在住。東京芸術大学美術学部工芸科卒業。主に、大量生産された家電やエレキギター、自動車や建築資材や玩具など、20世紀に完成した工業製品を用いて制作したサウンド・スカルプチュアを組み合わせ、インスタレーションや映像作品として発表している。近年は、自身や家族の物語をモチーフに、個人的な営みの記憶の断片や、日常的な物質や事象と、近代のヘゲモニーの象徴である軍事や鉄道などが対比的に重なり合う作品を発表している。ビエンナーレ・オブ・シドニー（2006）、個展「POP/LIFE」（箱根彫刻の森美術館、2013）、Mash Up: The Birth of Modern Culture（バンクーパー美術館、2016）、個展「Audio Distortion does not Distort Matter」（下山芸術の森 発電所美術館、2016）、ヨコハマトリエンナーレ2017 島と星座とガラパゴス（2017）など。

市民参加のかたち

制作参加／素材提供／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉駅周辺エリア／旧診療所

本プロジェクトは、千葉に点在する住宅団地を対象に、その歴史的背景や現在の住民の暮らしをフィールドワークによって丹念に読み解きながら進めているものである。調査を重ねるなかで明らかになってきたのは、住宅団地という空間が、常に「労働」と「集合」というふたつのキーワードと密接に結びついてきたという事実である。

団地に暮らす外国人労働者と、長年そこに暮らしてきた高齢者、それぞれにインタビューを行い、その言葉や身体記憶の手がかりに構築物を設計・制作する。そして完成した構造体を団地内の広場に設置し、住民たちとともにその構造物を「引き倒し／興し（Pull and Raise/Topple）」するパフォーマンスを実施する予定である。生活リズムや言語の違い、物理的な距離によって分断されがちな人々が、ひとつの行為を共有することで生まれる一時的な共有の場。それこそが、団地という集合体が新たなかたちで再構築される瞬間になると考えている。

●Profile：加藤 翼 Tsubasa Kato

パフォーマンス、構築物、映像を軸に、他者との協働やグループによる共同実践を通じて活動を展開している。代表作《Pull and Raise/Topple》シリーズでは、巨大な構築物を大勢の力で動かす行為を通じて、社会的な緊張や協力のダイナミクスを可視化する。

震災後の福島、アメリカ・スタンディングロック居留地、マレーシアの無国籍コミュニティなど、複雑な歴史や政治的背景をもつ土地においてプロジェクトを実施。また、韓国と日本の間にある無人島でのパフォーマンスなどを通じ、地政学的な境界、移動、帰属といったテーマに取り組んでいる。

2017年にシアトルで始動した《Songs While Bound》シリーズ（互いに縛られたミュージシャンたちによる国歌の演奏）や、パンデミック下の香港での《Superstring Secrets》（無数の秘密が書かれた紙をシュレッターにかけ、その紙紐で巨大な縄を編む）など、音楽や言語を媒介に国家、記憶、監視といった主題に接近し、個人と社会との関係を問い直している。

東京オペラシティ アートギャラリーでの個展をはじめ、ウォーターミル・センター（ニューヨーク）、ハンブルガー・バーンホフ現代美術館（ベルリン）、あいちトリエンナーレ2019（愛知）、ジュ・ド・ポーム国立美術館（パリ）などで、協働やアイデンティティの再構築を促すインスタレーションを国際的に発表している。



引き倒し／興し：Pull and Raise/Topple "Black Snake"2017
スー族スタンディングロック居留地、ノースダコタ、アメリカ

市民参加のかたち

リサーチ対象／制作参加／パフォーマンス参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

海浜エリア／幸町団地

●協力：独立行政法人都市再生機構、幸町団地自治会、幸町団地住民、
アクティブ日本語学院、BonBon Mart

千葉市内各区のアフタースクールや施設で「千葉市をテーマにしたテーマパーク」という題材で建築模型を作るワークショップを開催。子どもから大人まで、様々な人にみんなに伝えたい千葉市の名所や、自分だけが知っている景色や自慢したいものを集めて工作する。ワークショップをきっかけに、普段、生活している自分たちの場所を改めて考えることで発見があったり、他の参加者の作品を見て新たな興味が生まれたりといったことが期待できる。

ワークショップで作られた約200個の作品を一堂に集めて巨大な建築模型を制作し、展示する。それぞれが見て、考え、感じている「千葉市」が集まり、千葉市の形を作っていく。会場内にはワークショップスペースを設けるほか、千葉市のいろいろなカテゴリごとのおすすめスポット紹介コーナーや、展示会場自体をテーマパークにした鑑賞・体験スポットなどの設置も検討中。ワークショップ参加者も来場者も、みんながキャストになって、このテーマパークを作り上げていく。



市民参加のかたち

ワークショップ参加／作品制作／展示鑑賞

実施エリア・拠点

調整中

●Profile：栗原 良彰 Yoshiaki Kuribara

1980年群馬県生まれ。東京藝術大学大学院博士課程修了。博士論文『《F.E.S.-Fantastic Eccentric Show-》新たな「場」作りから生まれる世界』。

アーティストは、自由の体現者であるべきだという考えを持ち、従来のアートの制度に捕らわれることなく、アートが社会に対してアクチュアルに機能することを目的に活動している。特定の表現スタイルにこだわらず、彫刻や絵画、インスタレーション、ビデオ、パフォーマンス、映画、ワークショップなど、あらゆる表現方法で制作活動を行なっている。

私たちの暮らしには、さまざまな用途や意匠、生物の営み、あるいは欠損から穴があいている事物が存在している。日常では他の光に紛れているが、それらの穴に生じている小穴投影現象（ピンホールカメラの原理）により結ばれている光の像は、いま、ここに確かに存在する。それはまるで、光が人知れず独白を囁いているようだ。このプロジェクトでは、市民の方と協同して千葉市内の小穴投影現象が生じている穴を探索する。それらの「ピンホール」と呼ぶにはやや大きすぎる穴が映し出す光の像をフィルムや印画紙などの感光材に定着することで、私たちの身の回りのそこかしこに溢れている「光の言葉」を可視化する。

小穴投影現象により生じている光の像をさまざまな感光材に受けとめる行為とは、多様な写真言語を通して「光の言葉」を翻訳する行為であるといえるのではないか。私はここに提示されるイメージの作者ではなく、「光の言葉」の媒介者、あるいは翻訳者であれたらと思う。

●Profile：鈴木 のぞみ Nozomi Suzuki

1983年埼玉県生まれ。2007年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業。2022年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現研究領域博士後期課程修了。主な展覧会に「The Mirror, the Window, and the Telescope」(ポーラ美術館 アトリウムギャラリー、2024年)、「Words of Light」(第一生命ギャラリー、東京、2024年)、「潜在景色」(アーツ前橋、2022年)、「メディアムとディメンション：Liminal」(柿の木荘、東京、2022年)、「MOTサテライト2018 秋 うごきだす物語」(白河二丁目町会会館/大島倉庫、東京、2018年)、「無垢と経験の写真日本の新進作家 vol. 14」(東京都写真美術館、2017年)、「NEW VISION SAITAMA 5 迫り出す身体」(埼玉県立近代美術館、2016年)などがある。平成30年度ポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスにて研修。主な受賞に第41回写真の町東川賞 新人作家賞(2025年)、VOCA展2016 現代美術の展望—新しい平面の作家たち— VOCA奨励賞(2016年)など。主な出版物に「LIGHT OF OTHER DAYS」(rin art association、2022年)がある。作品は東京都写真美術館、アーツ前橋などに収蔵されている。



《Monologue of the Light : 看板に穿たれた穴から 埼玉》
2021年,発色現像方式印画,20.3×25.4cm

市民参加のかたち

ワークショップ参加／作品制作／展示鑑賞

実施エリア・拠点

市場町・亥鼻エリア／旧亥鼻郵便局など

千葉市民を対象にしたワークショップを通して、市内で過ごす日常の中にある「変わりゆく（エフェメラル）なもの」を土で形に残し、焼き締め（野焼き）によって作品化し展示する取り組み。参加者と街を歩きながら、風景や記憶に残したいものを粘土で拓本のように記録し、最終的にインスタレーションとして発表する。素材には地域の粘土を使用し、手を動かす体験から自然とのつながりを感じ、自分や他者、環境へのケアの意識を育てる。展示では、地域文化や記憶を未来に伝えるメッセージとし、過去と未来の視点から現在の暮らしを見つめ直す。市民同士の協働による作品制作を通じて、地域のつながりを生み、孤立感の緩和や文化的な誇りの醸成にもつなげることを目指す。展示場所は千葉市内の遊休空間を予定。

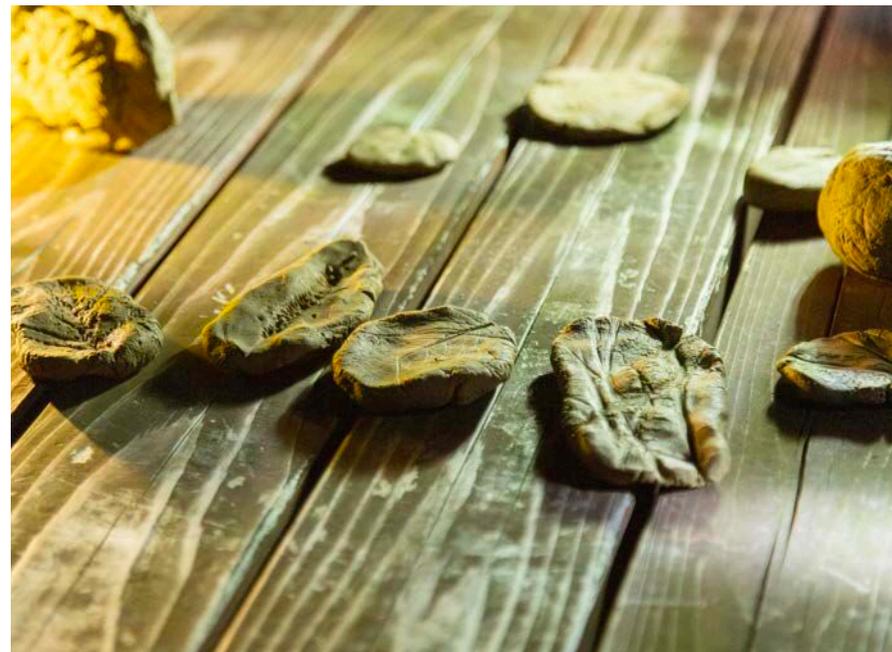
●Profile：諏訪部 佐代子 Sayoko Suwabe

パフォーマンス、構造物、映像を軸に、他者との協働やグループによる共同実践を通じて活動を展開している。代表作《Pull and Raise/Topple》シリーズでは、巨大な構造物を大勢の力で動かす行為を通じて、社会的な緊張や協力のダイナミクスを可視化する。

震災後の福島、アメリカ・スタンディングロック居留地、マレーシアの無国籍コミュニティなど、複雑な歴史や政治的背景をもつ土地においてプロジェクトを実施。また、韓国と日本の間にある無人島でのパフォーマンスなどを通じ、地政学的な境界、移動、帰属といったテーマに取り組んでいる。

2017年にシアトルで始動した《Songs While Bound》シリーズ（互いに縛られたミュージシャンたちによる国歌の演奏）や、パンデミック下の香港での《Superstring Secrets》（無数の秘密が書かれた紙をシュレッターにかけ、その紙紐で巨大な縄を編む）など、音楽や言語を媒介に国家、記憶、監視といった主題に接近し、個人と社会との関係を問い直している。

東京オペラシティ アートギャラリーでの個展をはじめ、ウォーターミル・センター（ニューヨーク）、ハンブルガー・バーンホフ現代美術館（ベルリン）、あいちトリエンナーレ2019（愛知）、ジュ・ド・ポーム国立美術館（パリ）などで、協働やアイデンティティの再構築を促すインスタレーションを国際的に発表している。



撮影 横山渚
企画 Primipedites

市民参加のかたち

ワークショップ参加／作品制作／展示鑑賞

実施エリア・拠点

市場町・亥鼻エリア／アーツうなぎ など

「第二副都心_千葉市海浜地区プロジェクト」は埋立地を起点としながら二つの軸で構成される。ひとつは、地域の方々との対話を重視した「歴史調査ツアー」で、生活のなかに埋もれた地域の物語や変化の痕跡を「生活遺産」として探し出す。もうひとつは、「観光案内所」をモチーフにした展覧会であり、「レジリエンス」「寛容」「癒し」をキーワードとして、調査を元に制作した作品の展示によって、視覚的・空間的に地域の記憶を再構成する。

本取り組みで「第二副都心」は、現代の都市環境と私たちとの新たな関係のあり方を探りだす。日常の生活に追われながら、無意識のうちに変貌していく街並みに、私たちはかつてあった風景や記憶との接点を失い、自己のあり方さえ揺らいでいく。

地域に眠る記憶に光をあて、調査～展示に至るプロセスを通じて、自らの環境をどう捉え直せるのか、そして「どのような関わりの中から自分たちの環境といえるものが創出できるのか」を検討する機会を設ける。

地域それ自体を見直すまなざしを共有する場として、また、都市に潜む記憶をひらく試みとして、本プロジェクトに多くの視点が交わることを期待している。

●Profile：第二副都心 Fukutoshin II

アーティストの春木聡と東條陽太を中心としたプロジェクト／アーティストコレクティブ。

「副都心」という、「大都市の周辺部に発達し、都心の機能の一部を分担する副次的な中心地区」の先にある【第二の副都心】の可能性を表現活動の中で試みる。

本プロジェクトで「第二副都心」は変貌する都市環境の中で失われつつある記憶や風景との接点を再構築し、私たち自身の環境への関わり方を問い直す場を創出する。

【構成メンバー】

春木 聡

1988年 千葉市生まれ 東京芸術大学大学院美術研究科修了

これまでの参加型の取り組みとして「東京芸術大学美術部」や「KOTOBUKI meeting」など。

東條 陽太

1988年 東京都生まれ 東京芸術大学大学院美術研究科修了

千葉市の埋立地出身。文明の痕跡を手掛かりに作品を制作する。



第一回歴史調査ツアー 2025.5.25

市民参加のかたち

イベント参加／資料回覧／展示鑑賞

実施エリア・拠点

海浜エリア／稲毛公民館など

「脱皮的彫刻」は、2023年に旧第一銀行横浜支店、2024年に多摩美BlueCube、2025年にバンクーバー美術館で行われた約60分のパフォーマンス作品である。パフォーマーは、自己の抱える葛藤について独白を行ったあと、全身を石膏で塗り固められ、そこから脱皮するプロセスを体験する。石膏に閉じ込められ、視覚と聴覚を遮られることで、意識が自然と内側に向く。最初は液状だった石膏は、やがて鎧のように固くなり、全身をぴったりと支える支持体となる。カスタムなシェルターに包まれた内省の時間が、この作品のハイライトである。そして、繊維を混ぜ込んだ石膏を体の後ろ半分に塗ることで、体の型を「抜け殻」のように残すことができる。千葉国際芸術祭2025では、この作品をパフォーマンスとしてではなく、ワークショップ形式で行い、「これまでの自分」としての抜け殻を展示する。市民から参加者を募り、会話をともにポーズを決め、石膏取りを行う。参加者の言葉、記録写真と共に展示する。

●Profile：高嶺 格 Tadasu Takamine

美術家・演出家。1968年鹿児島生まれ、東京在住。京都市立芸術大学、岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー卒。主な個展に、「とおくてよくみえない」（横浜美術館／広島市現代美術館／霧島アートの森を巡回、2011）、「大きな休息—明日のためのガーデニング1095㎡」（せんだいメディアテーク、2008）、「スーパーキャパシターズ」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2010）、「高嶺格のクールジャパン」（水戸美術館、2012）など。また、ヴェネツィア・ビエンナーレ（2003）、釜山ビエンナーレ（2004）、横浜トリエンナーレ（2005）、アジアパシフィックトリエンナーレ（2013）など、数々の国際展をはじめ国内外のグループ展に多数出品。90年代にパフォーマーとしてダムタイプで活動したほか、舞台作品への関わりが深く、他ジャンルとの共同制作も多い。多摩美術大学彫刻学科教授。



市民参加のかたち

ワークショップ参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

調整中

都市に日々蓄積されていく見えない記憶を可視化し、共有・保存することを目的としたアートプロジェクトである。都市とは常に変化し続ける場でありながら、その地に生きる人々や物質には、確かに時間の痕跡が刻まれている。本作は、そうした日常に埋もれた記憶や問いに目を向け、都市と個人との関係を再考する試みである。

作家自身がガラス製のタイヤを転がしながら千葉駅周辺の都市空間を移動する行為が、プロジェクトの中核をなす。シャフトに取り付けられた小型カメラがガラス越しに風景を記録し、その映像には都市の景観が歪んで映り込む。使用するガラスは、千葉駅周辺の路面から市民の協力によって採取された砂埃を素材の一部として作成する。交通の要所としてのこの地に日々蓄積される「都市の微細な痕跡」を可視化する試みでもある。

展示会場には、ガラスタイヤの実物と記録された風景映像を並置する。物質としてのガラスに刻まれた摩耗の痕跡と、映像として捉えられた歪んだ風景が重なり合うことで、鑑賞者に都市を異なる層で感知する新たな感覚をもたらす。社会課題の直接的な解決を目指すものではなく、むしろ日常の中に潜む問いをすくい上げ、鑑賞者自身の気づきや対話を生み出すことを、本作の本質としている。

さらに、ローカルリサーチの一環として、市内の小学生の靴から採取した砂を用いたガラス製のタイヤも制作を検討している。このタイヤは会期中、鑑賞者が自由に街中で転がすことができ、地域の記憶や環境との新たな関わりを体感できる場となる。

●Profile：地村 洋平 Yohei Chimura

1984年千葉市生まれ。2015年に東京藝術大学大学院博士課程を修了し、2025年より同大学ガラス造形研究室准教授。ガラス造形や金属鑄造を学び、日常的に素材を溶かす制作環境に身を置く。この経験から、熱を介して生まれる現象に関心を抱く。ガラス、金属、加熱したプラスチックを用いて、立体・平面・インスタレーション・パフォーマンス作品を発表している。

近年の主な展覧会に、2025年「マテリアル・フィーバー」（金沢21世紀美術館／金沢）、2023年「吹きガラス 妙なるかたち、技の妙」（サントリー美術館／六本木）、2021年「北アルプス国際芸術祭2020-2021」（信濃大町）、2019年 個展「≠世界」（千葉市文化センター、主催：（公財）千葉市文化振興財団／千葉市）などがある。



Photo: Shinichi Ichikawa

市民参加のかたち

材料提供／ワークショップ参加／展示鑑賞（体験あり）

実施エリア・拠点

千葉駅周辺エリア／千葉神社など ※調整中

●協力：株式会社千葉ステーションビル、JR千葉鉄道サービス株式会社、千葉神社

本プロジェクトは、千葉の土器文化をもとに、千葉の土を用いて器を制作・野焼き焼成し、それらが一万年後に発掘されることを想定したインスタレーションである。均質化が進む現代の街づくりや流通依存による文化の喪失に対し、地域固有の素材と手作業による景観づくりを通じ、生活と風景の再構築を目指す。展示では、築50年以上のアパートの一室に素材と向き合うことのできる空間を構成し、土器の時間軸をもとに、途方もない年月を見る者に想像させる。また、粘土採掘のために掘り下げた土地は遺跡として展示する予定。素材の採取から展示まで全てを手作業で行い、土地との関係性を実感を伴いながら再構築する表現となる。

併せてワークショップ「身近な土からうつわを作ろう」を開催。市内で粘土を採取し、陶芸家の指導で土器を制作、最終日には野焼きを行う。対象は小学校4年生以上の市民。火の安全対策も万全に行う。この体験を通じて参加者は、千葉の過去と未来を想像し、自分の関わりが未来の景色を形づくることを実感する機会となることを目指す。

●Profile：手と具 tetogu

手と具は、工芸とアートという2つのジャンルの拡張と併合を基軸として活動している、アーティスト・ブランド。土地からもたらされる素材と、文化が作り出す景色に着目し、工芸とアートの価値感が堆積する「器」の表現をベースに、双方の目線から携わり制作している。〈手〉は触れる、扱うための身体の一部、〈具〉はそなえおく用途のあるものであり、扱われる対象物を意味する。一万年以上前から続く人間の営みの本質や、ともにあった素材の実感を汲み取り、形にすると、私たちは一万年後の未来に遺りうる風景を想像することができる。2025年現在、千葉市中央区を拠点としながら、郊外でのフィールドワークを始めとした素材の採取や風景撮影、野焼き制作等を中心に活動中。自然と共存していく中で得られる質感や色彩を、作品として実在させることで、近代的な社会の中で忘れ去られている感覚を開放するきっかけとなることを目指している。

2022 外山慧（陶芸家/千葉陶芸工房主宰）を中心に発足

2023 手と具 STUDIO/GALLERY オープン



©2025 tetogu

市民参加のかたち

ワークショップ参加／作品制作／制作参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

西千葉エリア／黒砂台空き地、HELLO GARDEN
千葉公園周辺エリア／椿森コムナ、信濃屋ビル など

●協力：株式会社マイキー、千葉市動物公園、株式会社拓匠開発

「今昔絵有動物借景（こんじゃくえーあーどうぶつしゃっけい）」は、スマートフォンを活用したAR（拡張現実）体験が主となるプロジェクトである。千葉市動物公園を舞台に、往時に生きていたと考えられる動物と想像上の生物を、XR技術を使用して展示する。本展示では、古画に描かれた空想上の動物や、絶滅した動物を題材とした特別なカード制作を行う。

千葉市美術館所蔵のデジタルデータを活用し、江戸時代の浮世絵に描かれた幻の獣たち、通常は目にすることのできない「見えない動物」たちのカードをスマートフォンで読み取ることで、動物が画面上に現れ、まるで現実世界に存在するかのように感じられる体験を提供。

千葉市動物公園の動物科学館では絶滅危惧種の展示が行われており、本企画はこの既存展示と連携することで、過去・現在・未来の生命について考える機会の提供を行う。過去と現在、想像と現実を繋ぐこの企画により、来園者は新たな視点で生命の多様性と芸術の可能性を体感できる。千葉市の文化的資産を活用し、歴史ある美術資料と動物に関する展示と最新デジタル技術の融合を目指す。

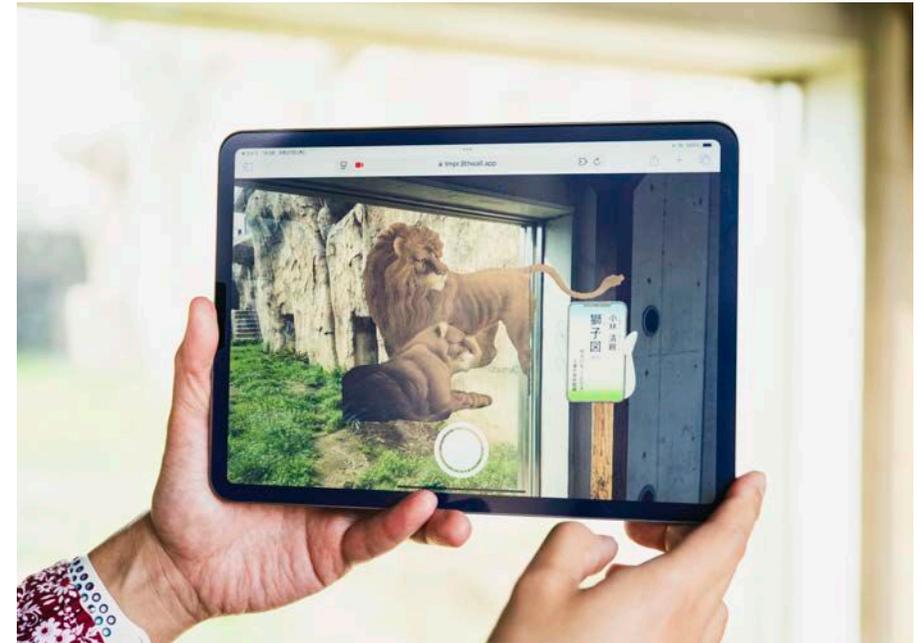
●Profile：TMPR

デジタルとフィジカル、ハイテクと手作業、モノの視点とヒトの視点を行き来しながら、まちと遊ぶアートユニット。立体デザイナー、立体プログラマー、平面デザイナー、対物プランナー、対人プランナーが協働中。2023年結成。読み方は「てんぶら」。

「2023年度 CCBTアーティスト・フェロー」に選出され、2024年1月に体験型作品《動点観測所（35.39.36.02/139.42.5.98）》を発表。「技術と人間の〈平熱の共存〉」を合言葉に、テクノロジーと街歩き、個人の日記を組み合わせたユニークな体験が話題となり、9日間で約200人が参加した。その後、CCBT COMPASS（2024年5月、東京・有楽町）、FabCafe Tokyo（2024年6月、東京・渋谷）等でも《動点観測所》シリーズを発表。同じことは二度やらないスタンスで、少しずつ作品の形が変化している。2025年3月、千葉市動物公園を舞台にAR技術と絵画作品、動物のイメージを組み合わせた体験型作品《今昔絵有動物借景》を発表（千葉国際芸術祭2025 プレ企画）。2025年夏にはさらにアップデートした《今昔絵有動物借景》シリーズを公開予定。

【構成メンバー】

岩沢兄弟、堀川淳一郎、美山有、中田一会、磯野玲奈（アートマネージャー）



撮影 ただ（ゆかい）

市民参加のかたち

ワークショップ／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉市動物公園、千葉県こども病院

千葉の街場で、町のテラーが活躍する環境をつくるプロジェクト。従来の仕立て屋のように完璧・完成を目指す服作りではなく、まち針で仮留めしたような工作としての自由な服作りで街に貢献する。

ワークショップ「〇〇の人」では、各回異なるテーマで参加者がユニークな服づくりに挑戦。作品に使うのは、まちの中から集めた服たち。ワークショップに4回以上参加すると、特別ワークショップ「オーダーメイドの人」に参加することができ、服づくりを完成させると「まちまちテラー」に認定。市民アーティストとしてのまちまちテラーに認定されると、そのユニークな発想・手法をもとに、町の仕事着や個人からの注文など、町の服を仕立てていく。

本会期中に現れるインスタレーション「まちまちいちば」は、まちまちテラーの仕事場／商品見本市／商談の場である。まちまちテラーが作った商品が陳列された「巨大な商品棚」のイメージで、観客はその中を巡り、ジャングルジムで遊ぶように、ユニークな商品と触れ合う場を作る。構造体の周りには、足踏みミシンが設置され、まちまちテラーの仕事場となる。このように、まちまちいちばは、観客が商品やテラーと出会う場になり、オーダーメイド制作の受注の場となる。ユニークな服作りと市場は街場に新しい交流を生むだろう。まちまちテラーとまちまちいちばが千葉のまち針となって、人と人の関係を繋げていく。

●Profile : 西尾 美也 Yoshinari Nishio

1982年奈良県生まれ。東京都在住。東京藝術大学大学院博士後期課程修了。博士（美術）。文化庁芸術家在外研修員（ケニア共和国ナイロビ）、奈良県立大学地域創造学部准教授などを経て、現在、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開。六本木アートナイト2014ではテーマプロジェクトを手がけ、六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、国立新美術館の3ヶ所で古着を再利用した大規模な作品を発表した。アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトの企画・運営のほか、ファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」を手がける。近年は「学び合いとしてのアート」をテーマに、様々なアートプロジェクトや教育活動を通して、アートが社会に果たす役割について実践的に探究している。主著に『装いは内破する』（左右社）、『美術は教育』（現代企画室）がある。



撮影 ただ（ゆかい）

市民参加のかたち

ワークショップ参加／ワークショップ運営／作品制作／素材提供／展示鑑賞

実施エリア・拠点

西千葉エリア／西千葉工作室など

●協力：株式会社マイキー、株式会社ZOZO、ひみつのおしゃれ工房

本プロジェクトは、千葉市緑区にある千葉県こども病院において、アートを通じた癒しと交流の機会を創出することを目的として実施される。長期入院を余儀なくされる子どもたちだけでなく、不安を抱える家族や、日々緊張感の中で働く医師・看護師など、病院という空間で日常を過ごすすべての人々に向けて、心の安らぎと自己表現の場を届けることを目指している。

昨年度はそのプレ企画として、まず病院スタッフを対象としたワークショップを実施。編み物や縫い物といったクリエイティブな体験と対話を通じて、スタッフの現状や思いを聞き出し、今後のワークショップの方向性を探るためのイントロダクションとして位置付けた。

本年度は、キュレーターおよび協力アーティストを迎え、病院の特性に寄り添いながら、現場の声を反映したワークショップや展示を展開していく予定である。芸術祭のコア期間（9月～11月）にとらわれず、病院や患者の状況に応じて柔軟に実施する。

このプロジェクトは、アートが単なる鑑賞対象ではなく、人と人との関係性を育み、孤立感や不安に寄り添う存在となる可能性を拡張している。



撮影 池ノ谷侏花（ゆかい）

●Profile：西原 珉 Min Nishihara

東京藝術大学美術学部卒業。キュレーター/心理療法士。1990年代の現代美術シーンで活動後に渡米し、ロサンゼルスでソーシャルワーカー兼臨床心理療法士として働く。家族療法、認知行動療法を中心に多くのアプローチを実施し、個人・グループに心理療法を行うほか、シニア施設、DVシェルターなどでコミュニティを基盤とするアートプロジェクトを実施。2018年に日本に戻り、アートとレジリエンスに関わる活動を行う。2021年4月より秋田公立美術大学で教鞭をとり、また国際美術展シリーズ「SPRING 2021」「SUMMER 2022」、展覧会「When we talk about us,」(2023)、国際芸術祭「東京ビエンナーレ2023」を手掛ける。現在、秋田市文化創造館館長、東京藝術大学先端芸術表現科准教授。

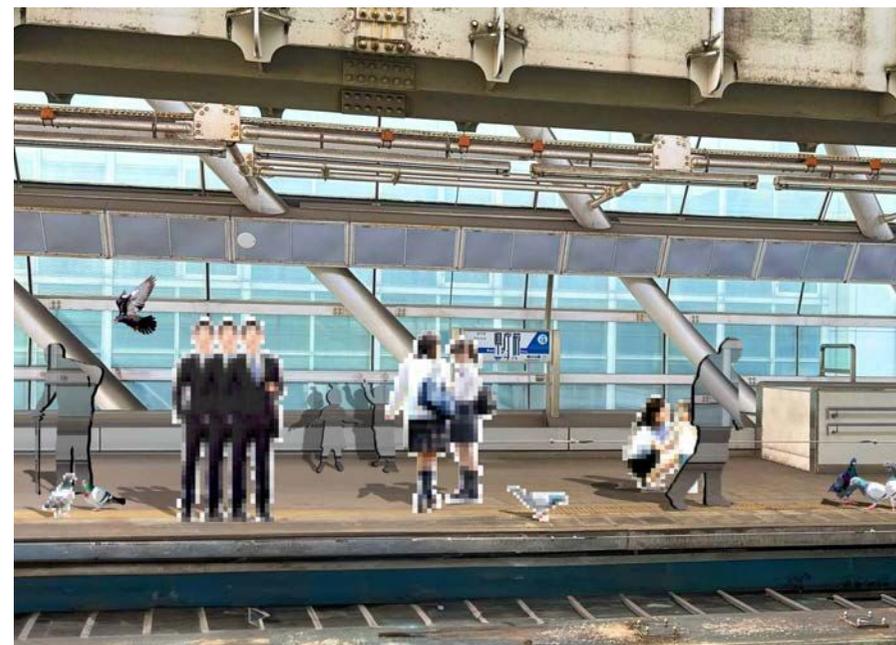
市民参加のかたち

ワークショップ参加

実施エリア・拠点

千葉県こども病院

本プロジェクトは、「日常のバグ」をテーマにした視覚体験型インスタレーションである。千葉都市モノレールの終点である県庁前駅は都市計画の最盛期に様々な問題で駅の延長を断念し、現在では使われていないホームが存在する。このような街の空白をパラレルワールド的な並行世界として存在する場所として仮定し、インスタレーション形式で再構成する。鑑賞者は普段目を向けない空間に潜む「現実の不具合」に気づき、作品を通して自らの都市認識を問い直す機会を得る。作品の中では使用されていないホームで、来るはずのないモノレールを待つ人々を作り上げる。この人々は事前に募集をかけた市民に実際にホームに立ってもらい、撮影する予定である。現実存在する人間たちをモチーフにするのも、もう一つの世界線であるパラレルワールドを示唆させるきっかけとなるのではないだろうか。作品内では角度によって像が変化するレンチキュラーパネルの構造を用い、人の存在が角度によって消えるような細工を仕掛ける。社会的には非実用的となった建築空間の再認識と、手つかずの空間による都市の衰退という課題に光を当てることを目的とする。場所の利用者や訪問者に、日常に紛れた非日常を体験してもらうことで、都市と記憶の再接続を目指す。



市民参加のかたち

被写体としての参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

市場町・亥鼻エリア／千葉都市モノレール県庁前駅

●Profile：沼田 侑香 Yuka Numata

1992年千葉県千葉市出身。2022年東京藝術大学大学院油画専攻修了。近年ではアイロンビーズ等の素材を用いてコンピューターバグや空間のバグをモチーフとした作品を展開している。主な展示として「現実とエラー」（調布市文化会館たづくり、2025）、「百年後芸術祭」（千葉県市原市、2024）、「クリテリウム100 沼田侑香」（水戸芸術館現代美術ギャラリー、2024）など。その他に、NIKE Jordan Brandでのコミッションワーク作品が渋谷の店舗「World of Flight Tokyo Shibuya」に展示されている。

檜皮 一彦 「walkingpractice™ CODE_Chiba City Arts Triennale 2025 (仮)」 18

本芸術祭では、自身が日常生活でも移動に用いる車いすに乗り、初めて千葉市を訪れ、まちなかに滞在し、リサーチを行うことからプロジェクトを開始する。当事者性の高い体験を通して、千葉市内の移動やアクセシビリティの考察を行い、市民参加のワークショップを中心に実施する予定。

リサーチやプロジェクトの成果は、芸術祭の集中展示・発表期間に常時展示し、市民が鑑賞できるように計画を進めている。車いすに乗るアーティストが「芸術祭」というスキームに参加することにより、芸術祭自体のアップデートが期待されるとともに、本芸術祭がより一層開かれた存在になるべく、チームと共にプロジェクトを実現していく。



walkingpractice: CODE Evacuation_drills [SPEC_MOMAS]

●Profile：檜皮 一彦 Kazuhiko Hiwa

大阪府出身。京都芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻修了。

身体性をテーマとした映像作品やパフォーマンス、自身も移動に用いる車イスを素材にしたインスタレーション作品「HIWADROME」シリーズをファーストラインに、旅やワークショップ、建築への介入を通してモビリティやアクセシビリティの考察と提案を行う「walkingpractice™」、ペインティングを中心とした「DRAWING EXPERIMENT」、車イス編み機による路面レコーディングプロジェクト「TRAIL by walkingpractice™」、 「Electric wheelchair sound generator」を用いたノイズサウンドギグなどを展開している。

最近の展覧会「アブソリュート・チェアーズ」(埼玉県立近代美術館 / 埼玉、愛知県美術館 / 愛知 / 2024)、「MICUSRAT -MUSIC LOVES ART-」(中之島フェスティバルタワー / 大阪 / 2024)、「おかえり、ヨコハマ」(横浜美術館 / 神奈川 / 2025)、「Study: 大阪関西国際芸術祭」(EXPO 2025 大阪・関西万博会場夢洲 / 大阪 / 2025)

市民参加のかたち

ワークショップ参加 / 素材提供 / 制作参加 / 展示鑑賞

実施エリア・拠点

西千葉エリア

33年でひとつの世代が入れ替わる。2世代で66年、3世代で99年となる。私の娘が生まれた33年前、1992年は、インターネットやスマートフォンなど、デジタル文化が開花する前の時代だった。さらにその33年前、私が生まれた1960年は、プラスチック製品や電化製品、自動車が普及し始め、大気汚染や海洋汚染が始まった時代だった。この2世代の間に、世界の流通は大きく変化し、大量の商品や情報が暮らしを変えてきた。科学技術は、人々の生活を高度かつ高速に進展させてきたが、一方で排出ガスによる大気汚染や、排水による海洋汚染、さらには気象変動による大災害など、廃棄物による影響は環境に大きな変化をもたらし、地球規模の課題となっている。「今の子どもたちが活動を担う33年後、2058年の未来は、どのような地域社会になっているだろうか。」私は、これまでの時代に作られてきた都市、商品、エネルギーなどが流通した後の廃棄物のあり方に注目し、活動を重ねてきた。それらが次の時代にどのように受け継がれ、どのような循環システムに還元されていくのか。そのような廃棄物の未来について、さまざまな可能性を模索したいと考えている。

この活動に関連して、子どもたちが不要になったおもちゃを交換する「ちからのかえっこ」を千葉市内の数カ所で開催する。またこれまでの活動で集まったプラスチック素材を用いて「かえるの池」を制作・展示し、33年後の地域社会や地球環境について子どもたちと考えるプロジェクト「33年後のかえる」を展開したいと考えている。

●Profile：藤 浩志 Hiroshi Fuji

1960年鹿児島生まれ。京都市立芸術大学在学中演劇に没頭した後、パプアニューギニア国立芸術学校講師、東京での都市計画コンサルタント勤務を経てプロジェクト型の美術表現を全国各地で実践。92年「2025蛙の池シンポジウム」でJapan Art Scholarship（グランプリ受賞）、バングラデシュ・ビエンナーレ（グランプリ受賞）、サイトサンタフェビエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭等の国際展の出品をはじめ、国内外のアートプロジェクトに数多く関わる。取り壊される家の柱からつくる「101匹のヤセ犬」、給料一ヶ月分のお米から始まる「お米のカエル物語」、家庭廃材を蓄積する「Vinyl Plastics Connection」、不要のおもちゃを活用した「Kaekko」「Jurassic Plastic」、架空のキーパーソンを作る「藤島八十郎」等。十和田市現代美術館館長を経て秋田公立美術大学教授



市民参加のかたち

ワークショップ参加／イベント運営／素材提供／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉駅周辺エリア／そごう千葉店など

●協力：株式会社千葉センシティ 株式会社そごう・西武 そごう千葉店

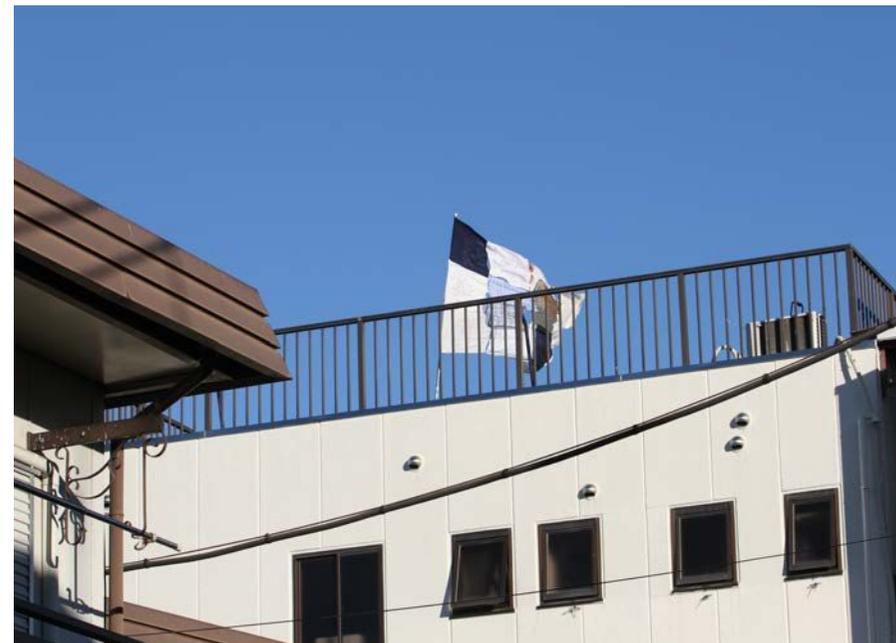
対話を行いその痕跡で旗を立てるプロジェクト。

ワークショップでは、そこで出会った人同士が自由に語り合う。ただし話す際は、布やハンカチ等に共に「落書き」をしながら話す。ここで描かれる「落書き」は、会話の中で面白いと思ったことのメモかもしれないし、相手に何かを伝えるための図やイメージかもしれない。そうやってワークショップを通していくつもの布に残された「落書き」＝「対話の痕跡」をアーティストがつなぎ合わせることで、それは旗となる。

対話のワークショップは千葉市内各所にて行われ、それぞれの場所で行われた対話の痕跡は、それぞれの場所で旗として掲げられる。

来場者は、本会期中に各所に立てられた旗と出会うことで、様々な場所における様々な対話を目撃することとなる。

自分の身体で会いに行くこと、自分の目で目撃すること、時間と空間を共有すること、対話すること。プロジェクトを通じてそれらについて考える。



市民参加のかたち

ワークショップ参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉駅周辺エリア／第一山崎ビル、西千葉エリア／HELLO GARDEN

●協力：株式会社マイキー

●Profile：前島 悠太 Yuta Maejima

2024年早稲田大学創造理工学部建築学科退学。2025年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻在籍。メディアや領域を横断しつつ、現在は主にコミュニケーションや場づくりを題材にした作品、プロジェクトを展開。主な作品に、他者との会話の痕跡を記した旗を街の屋上に掲げるプロジェクト《対話について》、10日間にわたって浜辺で砂山を作り続けるアクション《砂山》などがある。また2019年から継続して楽曲制作を行う。

千葉駅周辺は、かつて風俗店や個人商店が密集し、人々の営みとともに栄えてきた地域である。近年では、千葉駅の移転や都市再開発の影響により、当時の風景や空気が徐々に変化し、記憶の輪郭も薄れつつある。

本プロジェクトは、そうした変容の途中にあるこの街に残された痕跡を拾い集め、記録し、それを素材として自分の巣として再構成し、展示することを試みるものである。

商店や公園、店舗跡などを訪ね、壁や棚、床の凹凸など街の表面に現れた情報と、そこにいる人々との会話ややりとりを通して、この場所に蓄積されてきた生活の気配を探る。記憶や語りだけに依存せず、自らの身体を通して環境に接触することで、街との関係を構築していく。

得られた情報や記録は、展示空間において立体的な構造やインスタレーションとして再構成される予定である。

街での観察や行為の過程とともに、映像や記録物も含めて展示する。

●Profile：水口 理琉 Riru Mizuguchi

2000年、静岡生まれ

2023年3月東京藝術大学美術学部絵画科油画科卒業

2023年から東京藝術大学美術研究科壁画第一研究室に在学中

即興的にその場にあるものを使って身の回りを囲う「巣づくり」を通じて、場と人が新たな関係を築くことを目的に制作をしている。

主な展示歴

2025 「織り入って、」タイレジデンスプロジェクト@baan Noorg arts and collectives

2024 「NESTII」オーストラリアレジデンスプロジェクト@Tanks arts centre

2024 「INVOLVEIII」千住人情芸術祭 1DAYパフォーマンス表現街@東京北千住

2024 「村を編む」100年後芸術祭、市原市おもてなし交流事業@千葉市原

2024 「未来の大芸術家たち」@平成記念アートギャラリー

2023 第71回東京藝術大学卒業修了作品展ooiill@中央棟第6講義室

受賞歴

2023 平成芸術賞、2021 上野芸友賞



市民参加のかたち

リサーチ対象／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉駅周辺エリア

千葉国際芸術祭2025のシンボルである「ち」の形をした10個のモニュメントを、呼びかけによって集まった千葉市内10箇所の障害福祉施設との協働を通して創作する。千葉市内には、障害のある人が通う生活介護事業所・就労支援事業所だけでも240箇所存在している。地域で暮らす障害のある人にとって欠かせない場所であるものの、その存在や活動を知る近隣住民はそこまで多くないのが実情だ。

宮本は本プロジェクトで10箇所の施設に通い、障害のある人（本プロジェクトにおいては「仲間」と呼ぶ）のやりたいこと、身体の動き、特性、関心に合わせた創作方法を一人ひとりに提案し、やりとりを重ねていく。つくるのは「ち」型モニュメントだが、その過程でのコミュニケーションや、本人や職員が気づかないようなささやかな「表現」を発見することも重要な点としている。

社会福祉における「障害の社会モデル」では、「障害」とは個人に帰属するものではなく、社会に存在するものと定義されている。本プロジェクトは地域に点在する福祉施設をアーティストがたずね、そこに通う人と交流し、関係から生まれたものをまちなかへそと解放していく試みだ。この活動を通し、千葉市内に存在する大小さまざまな「障害」を少しずつほぐしていくことを目指す。

●Profile：宮本 はなえ Miyamoto Hanae

1985年千葉県四街道市出身。千葉県立検見川高等学校卒業。2010年武蔵野美術大学造形学部油画学科版画専攻卒業。双子の母。社会福祉士、保育士、調理師。社会福祉法人よつかいどう福祉会理事、同法人地域コーディネーター、及び「生活介護はちみつ」主任支援員。言葉では言い表せない感情や事象を表現するために絵を描いている。2015年より四街道市在住の若手作家によるグループ展「テンテンテン・・・展」を立ち上げ、今年10周年を迎える。2017年より子ども向けアートワークショップを開始。現職では、主に知的障がいのある成人のアート活動を支援。作品展企画ほか、四街道市と協働してTシャツやイベントチラシ等へのアートワーク起用を進める。アートは、言葉以外でのコミュニケーションツールとして、どんな人にも有意義なものであると考えている。10代の頃、毎日過ごした千葉駅周辺のストリートアートに惹かれ、美術を志してからはアール・ブリュットに魅了されている。



市民参加のかたち

ワークショップ参加／制作参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

市内福祉施設など

広告とアートの境界を問い直す試みとして、消防署などの壁面をキャンバスにしたアートプロジェクトである。アイデアの出発点は、公共空間における「広告」と「警告」の関係性に着目することにある。長きに渡り広告とデザインの業界で活動してきた箭内氏がつくる啓発広告。アーティスト自身が撮影した視覚的なインパクトを持つビジュアルとコピーを用いることで、単なる注意喚起にとどまらず、現代社会における情報の在り方に警鐘を鳴らす試みでもある。

社会の中で注意喚起と情報拡散がどのように作用し合うのか、公共広告の在り方そのものをアートとして再考する実験的なプロジェクトである。

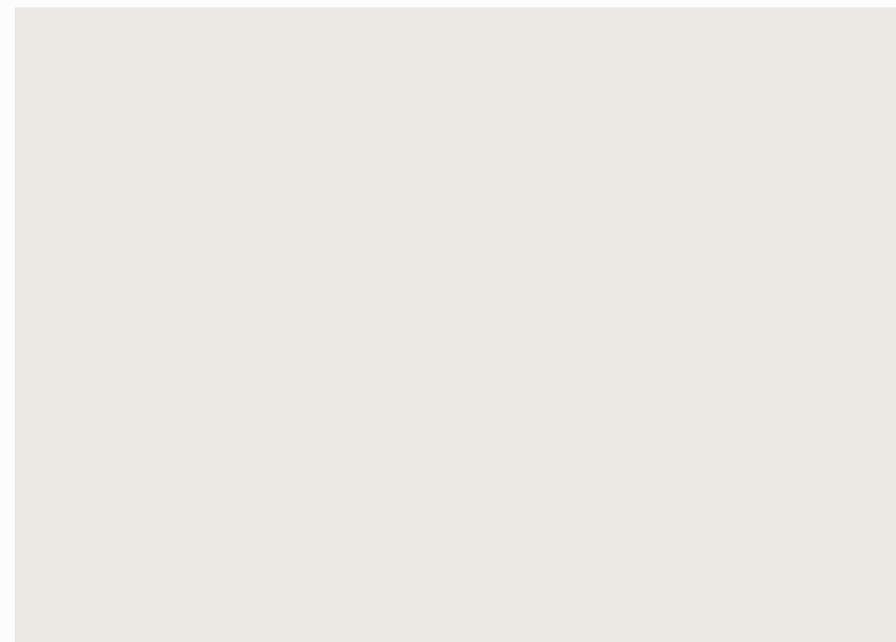
●Profile : 箭内 道彦 Michihiko Yanai

1964年福島県郡山市生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科卒業後、株式会社博報堂を経て2003年に風とロック有限会社を設立、現在に至る。

タワーレコード「NO MUSIC, NO LIFE.」、リクルート「ゼクシィ」、サントリー「ほろよい」、パルコ「SPECIAL IN YOU.」東京メトロ「Find my Tokyo.」など、既存の枠に捉われぬ数々の話題の広告キャンペーンを長く手掛ける。

「月刊 風とロック (定価0円)」発行人・編集長、福島県クリエイティブディレクター、「渋谷のラジオ」名誉局長、東京藝術大学教授・学長特命、2011年大晦日のNHK紅白歌合戦に出場したロックバンド 猪苗代湖ズのギタリストでもある。2024年3月にはさいたまスーパーアリーナで「箭内道彦60年記念企画 風とロックさいしょでさいごのスーパーアリーナ"FURUSATO"」2daysを主催した。

領域を自在に超え、従来の概念を解体しながら、そのすべてを「広告」として、様々にクリエイティブディレクション、ブランディング戦略を手掛けている。



市民参加のかたち

展示鑑賞

実施エリア・拠点

市場町・亥鼻エリア／千葉市消防局 中央消防署（セーフティーちば）※調整中

千葉市は、ひとつの有機体である。そこでは、一人ひとりが異なる役割を担いながら、まるで交響曲における楽器のように調和を生み出している。特に日本においては、この「調和」という概念が、都市のあり方や人々の振る舞いにおいて、他国と比べても際立っている。

本プロジェクト「Secret people (秘密の人々)」は、そうした都市機能の洗練された仕組みの背後にある「人間の顔」に焦点を当てる試みである。ふだん目にする事のない、都市を支える労働者や生活者の姿に目を向け、その存在を可視化する。

プロジェクトでは、都市の中で働く人々に密着し、彼らの日常をストリートドキュメンタリー形式で撮影・構成する写真展を行う。観光的な視点や偶然のスナップではなく、継続性のある「シリーズ」として丁寧に構築していく点が、本企画の特徴だ。

私は、これまでに日本を数回訪れ、各地の都市を巡りながら、日常の風景を撮影してきた。しかし、それらは一過性の「観察」にとどまっていた。今回のプロジェクトでは、そこからさらに踏み込み、「没入」と「記録」の両立を目指している。

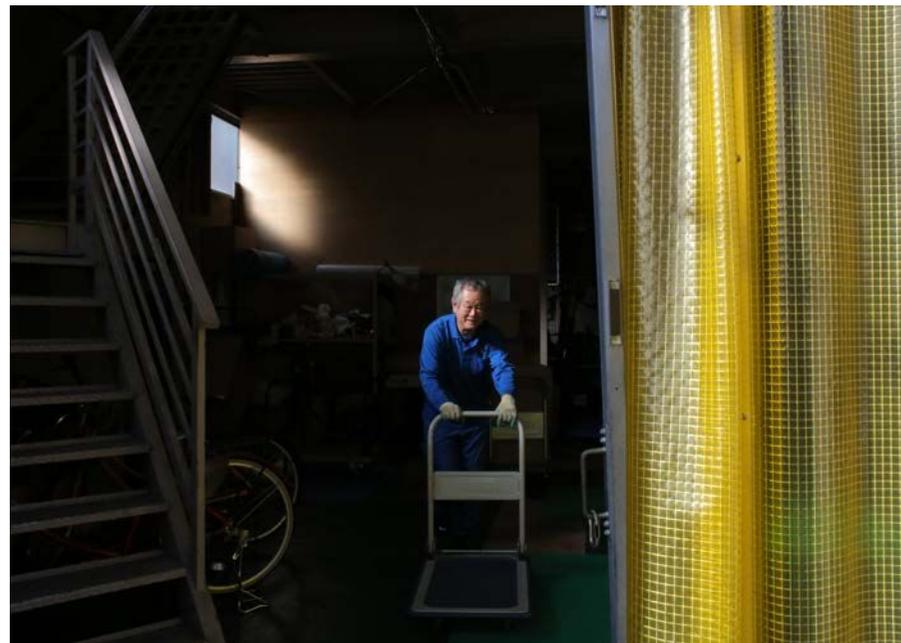
都市に暮らす人々の一瞬一瞬の姿を捉えることで、「都市とは誰によって成り立っているのか」という問いを投げかけたい。私たちは日々多くの人とすれ違いながら、そのほとんどを見過ごしている。本作は、そんな「見過ごされた存在」に光を当てるものである。

写真とは、時に立ち止まり、「当たり前」の中に潜む美しさを発見する行為である。本シリーズは、極めてシンプルである。「私」と「カメラ」、そして「都市という現場」だけがある。

●Profile：アレクセイ・クルプニク Alexey Krupnik

1990年、ロシア・モスクワ生まれ。ストリートダンスをきっかけに、創作活動を始めた。2010年代後半、ロシアでデジタル一眼レフカメラが普及しはじめた頃、映像という新たな表現手段に出会い、視覚芸術への情熱が芽生えた。この経験が、現在に至るキャリアを切り開く大きな転機となる。

現在は映画監督として、ロシア国内の広告やアニメーション、ミュージックビデオの分野で幅広く活動している。作品は、独自のスタイル、細部へのこだわり、そして感情に訴えるストーリーテリングが特徴。いまでは、ロシアでもっとも注目される広告ディレクターのひとりとして知られている。



市民参加のかたち

リサーチ対象／被写体として参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉市内各所

アリーナ・ブリュミス & ジェフ・ブリュミス 「家族との晩ご飯へ贈られる絵画」 25

『家族との晩ご飯へ贈られる絵画』は、異なる文化や地域で展開されてきた参加型アートプロジェクトである。これまでに実施された地域には、ドイツ・ドルトムント（2025年）、日本・東京（2021年）、イタリア・レッチェ（2013年）、中国・北京（2013年）、アメリカ・ニューヨーク・ブルックス（2012年）、イスラエル・バット・ヤム（2008年）などがあり、62組の家庭と夕食を共にしてきた。

千葉国際芸術祭2025では、千葉市民に対して次のように呼びかける。「夫婦でもある2人組のアーティストが、家族の晩ご飯への招待と引き換えに絵画をプレゼントします。詳細はメールか電話でお問い合わせください。」この呼びかけに応じてくれた家庭を訪問する。特別なルールや演出は設けず、そこに生まれる関係性を大切に。夕食の前には、果物を描いた静物画を制作し、その中央には「Thank You for Your Dinner!（ごちそうさまでした）」と記す。食後にはその絵を壁に掛け、家族とともに記念撮影を行う。この絵は家族に贈られ、夕食に招いてくれた証として残される。

集中展示・発表期間では交流から生まれた記念写真を展示する。日常の営みに深く根ざした本プロジェクトは、地域で暮らす人々の参加によって成立する。アーティストと家族は対等な立場で関わり合い、共にプロジェクトを形づくる「共同制作者」となる

●Profile：アリーナ・ブリュミス & ジェフ・ブリュミス Alina Blumis and Jeff Blumis

ベラルーシ・ミンスク出身のアリーナと、モルドバ・キシナウ出身のジェフは、ともにニューヨークへ移住し、それぞれSchool of Visual Arts（アリーナ／1999年）とコロンビア大学（ジェフ／1980年）を卒業した。移住の経験は、アーティストとしてのアイデンティティを探る出発点となり、作品制作における重要なインスピレーションの源にもなっている。社会的・政治的なテーマに取り組むリサーチベースの手法を用いて作品制作を行い、シリーズとして展開している。そのため、多くのプロジェクトは長期にわたって継続され、複数の媒体で表現することで視覚表現の可能性を広げている。物理的・政治的・社会的な「境界」を越えることは、キャリアを通じて一貫した関心の対象である。創作は常に、「内と外」「境界と中心」「他者と規範」といった関係性への問いを含み、「外部にいること（外在性）」という視点に基づいている。政治的な課題を美的体験へと変換することで、「断絶」や「他者性」といったテーマを日常生活に持ち込み、そこに潜む「異国性」の違和感や亀裂を可視化しようとしている。



A Painting For A Family Dinner,, Bat Yam, Israel / 2008 ©Alina Blumis, Jeff Blumis

Photo by Dafna Gazit

市民参加のかたち

リサーチ対象／制作参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

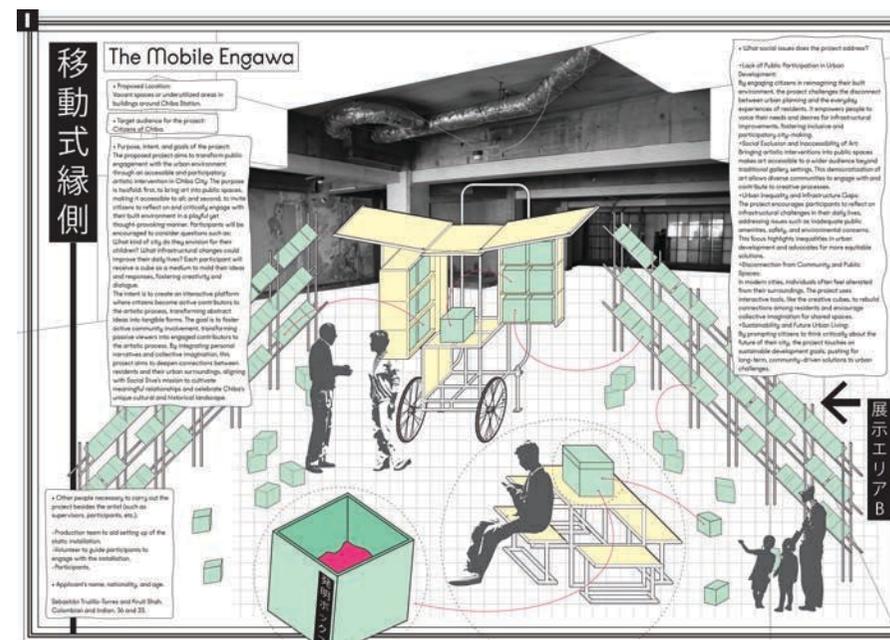
千葉市内各所

「移動式縁側」は、千葉のまちなかで人々の想像力や対話を引き出すことを目的とした、可動式の小さな公共スペースである。パーツを組み合わせて構成されたこの装置は、鑑賞者にとってはアート作品であり、参加者にとっては触れたり動かしたりできる道具でもある。

本プロジェクトでは、千葉駅周辺の見過ごされがちな場所にこの「縁側」を設置する。人々は、都市への思いや不満、こうであつたらよいという願いをキューブに書き込み、自由に動かすことで、空間をともに構築していく。

名称の由来である「縁側」は、日本の伝統的な住宅に見られる、屋内と屋外をつなぐ中間的な空間である。本作は、誰もが気軽に立ち寄り、会話が生まれ、ひと休みできるような場を目指している。

プロジェクトは、リサーチ、設計、制作、設置、運用、更新という6つの段階を経て展開される。公共空間を、単なる通過点や機能的な場としてではなく、人々が共に関わり合いながらつくり上げていく「共創の場」として捉え直す視点を提示している。本プロジェクトは、アートと都市計画のあいだに橋を架ける試みである。壮大なスペクタクルを目指すのではなく、都市に息づく日常の手触りや小さな違和感、そして未来への手がかりを、市民の感覚にそっと届けようとする方法論である。



©Chaal Chaal Agency

市民参加のかたち

ワークショップ参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉市内各所の街角

●Profile：チャール・チャール・エージェンシー Chaal Chaal Agency

セバスチャン・トルヒージョ＝トーレスとクルーティ・シャーによって2017年に設立された、建築とアートの実践団体。ムンバイとボゴタを拠点に、アート、都市インフラ、社会活動の領域を横断しながら、デザインの民主化を目指して活動している。参加型の仕組みや軽量のインフラ、国際的なリサーチを通じて、グローバル・サウスにおける都市の新たな可能性を探求し、それを展開可能な都市モデルとして提示している。

成功とは、個体、人格、あるいはモノに寄生するように共生的な関係を築くものだ。経済的な視点から見ると、それは労働力を搾取する装置であり、生産性や才能、美しさ、力、知性、技術といった個人の特性を取り込みながら機能する、偽装された搾取の仕組みである。成功は「意味を生む物語」のふりをして、むしろ個人の行動を制限する。

動機というものは、他者の評価や物質的な報酬に依存しない。自身の関心や達成感から内側に湧き起こるものである。そして野心とは、「もし自分が～だったら」「もし成し遂げられたなら」といった現実に根拠のない仮定に基づいており、その多くは幻想にすぎない。

人の選択は、そのときどきの状況に影響されながら「意味」の感覚を形づくっていく。しかし選択が必ずしも意味から導かれるわけではなく、逆もまた然り。そこには自己回帰的で終わりのないループが存在する。

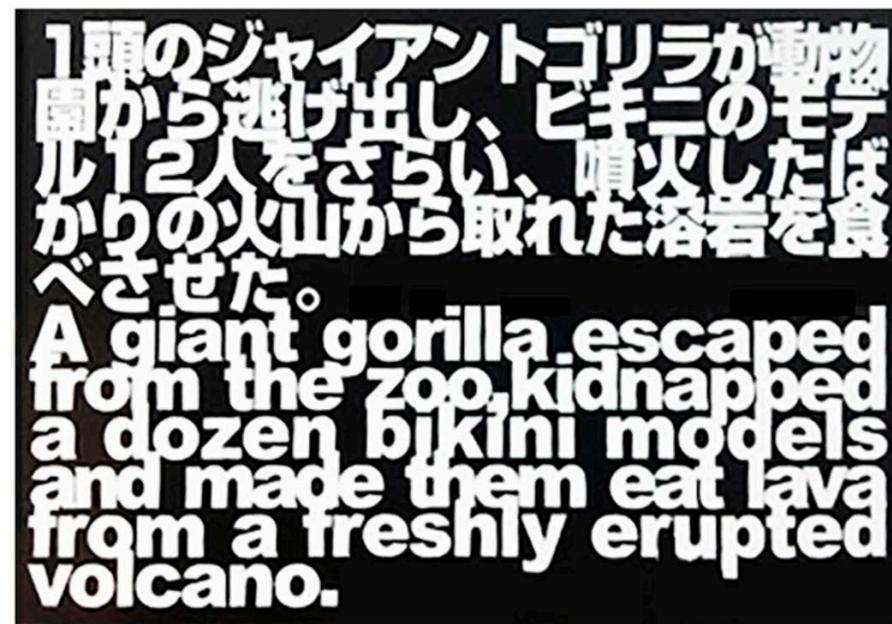
意味という概念は、多層的で複雑である。それは時間という概念と切り離せず、「一貫性」や「洞察」といった性質を帯びつつ、説明的でもあり、予測的でもある。では、自分は作品に対して、あるいは世界に対して、どのような意味を持っているのだろうか。

人間は、自らを見つめ直す力を持っている。自分の存在を意識し、思考や感情、そして精神の「内臓」とも呼べる深部に、洞察を向けることができる。

このプロジェクトでは、千葉市内の複数の会場で作品を展開する予定である。

●Profile : グレゴリー・マース&ナヨンキム Gregory Maass & Nayoungim

グレゴリー・マース（1967年4月29日ドイツ、ハーゲン生まれ）とナヨンキム（韓国名：キム・ナヨン、1966年3月13日韓国、ソウル生まれ）は、グレゴリー・マース & ナヨンキムというデュオで活動する2人組のアーティストである。グレゴリー・マース & ナヨンキムが制作のために着目するのは、哲学、心理学、SF、イギリスのアート & クラフト運動、音楽、コミック、アウトサイダー・アート、サブカルチャー、そして食など、多岐にわたる。彼らは韓国のキム・キム・ギャラリーの創設者でありながら、一般的なアートギャラリーの形式はとらず、非営利で運営している。自身の制作の傍ら、キュレーションや展覧会デザイン、希少な美術書の編集なども行う、マルチに活動するアーティストデュオである。



市民参加のかたち

ワークショップ参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉市内各所

I WISH TOMORROW (IWT) は、「願いごと」という誰にとっても身近な行為を通じて、人々の対話や共感を促すアートプロジェクトである。参加者は、自身の個人的な思いを言葉にしながら、地域や世界とつながる物語の一部となる。インスタレーションを通じて、一人ひとりの願いが他者と交わり、理解や思いやり、つながりを促す。

IWTでは、誰もが匿名で、いつでも、どんな言語でも未来への願いを投稿できる。毎晩、その願いが夜空に光の文字として投影され、宇宙へと放たれる。「願い」がいつか叶う未来への希望が、ひとつの光となって現れる。

本作は、「願う」という根源的な人間の行為に着目している。ブラジルの「ボンフィン・フィタ」や、トルコの「願いの木」、オランダの「ウェンスブーム」、東アジアの「七夕」など、世界各地には願いを言葉に託す風習が存在する。IWTはこれらの文化的慣習を再解釈し、現代的な光のインスタレーションとして表現している。

インタラクティブな光のインスタレーションは、願いを継続的に集めて可視化し、文化や言葉の違いを超えて、多くの人の思いが重なる物語と参加の場を生み出す。そうして集まったささやかな願いは、公共空間に立ち上がる表現として共有されていく。

●Profile：マシャ・トラヴリアニン Maša Travljanin

参加型の構造や視覚的なパターンを通じて、物語を紡ぐ作品を展開している。体験型のインスタレーションでは、鑑賞者が能動的に関与し、作品の一部となる。作品の意味は固定されず、メディアと鑑賞者のあいだに生まれる継続的な相互作用によって変化していき、対話を生み出している。こうした実践は、儀式や伝統から着想を得た要素を、現代のデジタルアートとして再構築することで生まれている。土は繰り返し扱ってきた素材のひとつであり、「借りて、返す」ものとして位置づけている。地に足をつける力を象徴するとともに、平等化の媒体であり、身体とのつながりを示す素材でもある。絵画作品では、壁紙をキャンバスとして用い、加工した家族写真を壁紙に描かれた伝統的な装飾に重ねている。壁紙の持つ親しみやすさと繰り返しのパターンによって、作品は流動的な性質を帯びている。反復が意味をどのように変容させるのかを探る試みでもある。こうした絵画は、1990年代のボスニア内戦以前の生活を想像しながら、戦争の遺産や現在の社会的文脈を映し出している。



市民参加のかたち

ワークショップ参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉市内各所

●協力：西尾レントオール株式会社

ゲームは、他者とつながるための大切な手段であり、日常において欠かすことのできない存在だと考えている。人間のゲームへの欲求は根源的な本能に由来すると捉えており、それが人と人との間に関係性を築く橋渡しとなる。

これまでの実践のひとつに、中国の都市で行った「シティゲーム」プロジェクトがある。公共空間における人々と建物の新たな関係を創出し、歴史ある街区に一時的な「ゲームの世界」を立ち上げることを目指した。見知らぬ人と路上でチェスを行い、通りを即席のゲーム場に変え、二つのゴミ箱を使ったオリジナルゲームも実施するなど、街なかで即興的に展開してきた。

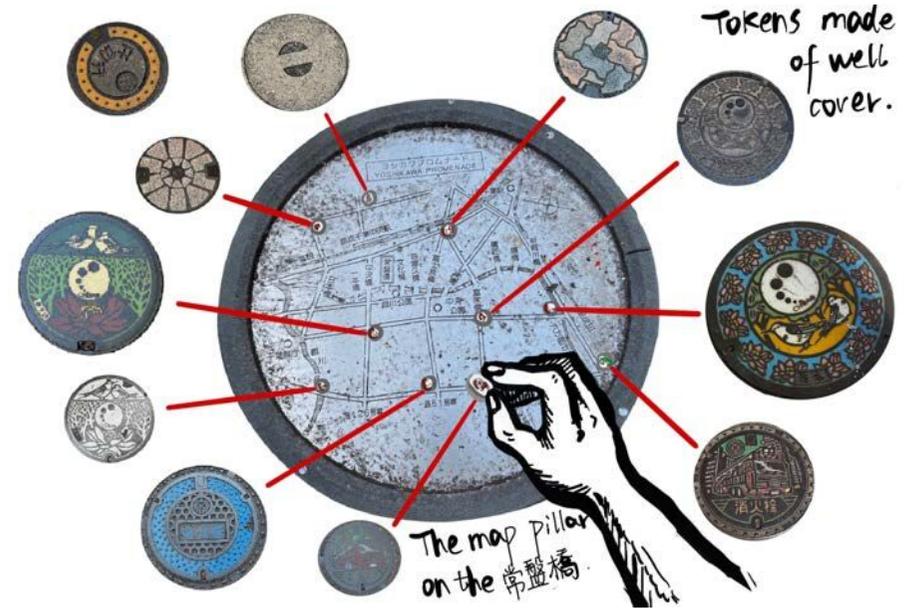
千葉国際芸術祭2025では、リサーチを通じて地域に入り込み、市民の日常のなかに潜む創造性を発見し、そこから着想したゲームのルールを設計することで、都市空間に新たな力を与えることを目指す。

「千葉シティゲームウィーク」と題された本企画では、1週間にわたり街の各所で小さなゲームを展開する予定である。地域の人々がプレイヤーとして参加し、遊びを通じて身近な空間や日常の風景に新たな意味を見出す機会となることを期待している。

●Profile：史宇昕 Shi Yuxin

大学では版画を専攻し、卒業後は作品の中心が版画から「ゲーム」へと変化した。地域社会や人々との関係を築く手段として、ゲームを用いた表現に取り組んでいる。版画、インスタレーション、パフォーマンスなど多様な手法をゲームと組み合わせながら、都市をさまようドリヴ（dérive）やフィールドリサーチといった調査的なアプローチも積極的に取り入れてきた。

その土地の特性に応じたゲームの設計を通じて、既存の枠組みやルールを現実のなかであえて破り、日常のすぐそばに新たな状況を立ち上げようとしている。現実世界の中でゲームを動かす、「本物のゲームマスター」になることを目指している。



市民参加のかたち

ワークショップ参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉市内各所の街角

サイモン・ウェットテム 「Made to Malfunction in Chiba (千葉で壊れるために生まれた)」 30

このプロジェクトは、不要と見なされたモノを再利用し、異なる文脈に置くことで、それらが別の目的を果たし、創造的な作品の一部として新たな価値を取り戻す可能性を示している。時代遅れの製品の中に見出される価値や魅力を可視化すること。また、家電製品を手放す際のような選択肢があるのか、それらが本来の設計意図とは異なる使い方をされたとき、私たちの体験がどのように変化するのかについて考察することが、本プロジェクトの柱となっている。

まずは千葉市民に中古小型家電の提供を呼びかけることから始める。提供されたモノたちは、作品の一部として「第二の人生」を与えられることになる。滞在制作の後半には制作プロセスを公開し、関心のある市民はその様子を見学するだけでなく、実際に制作に関わることもできる。

●Profile：サイモン・ウェットテム Simon Whetham

2005年から、パフォーマンスや作曲、インスタレーション作品の中で、音を創造的に扱ってきた。音を、場所を探る手段として用いてきた。そこにある特徴的な音や隠された音を聴くには、じっくりと耳を澄ませる必要がある。そうした体験を通して、場所が持つ物理的、社会的、心理的な側面に触れることができる。近年は、消費社会や使い捨て文化と結びついた素材の特性や質感にも関心を持ち、探究を続けている。音の力で物体を動かし、さまざまな素材を通して音を響かせたり、変化させたりする。また、天候や故障した機器など、予測できないアナログの仕組みをあえて取り入れ、自分だけでは制御できない環境や偶然との協働を楽しんでいる。すでに使われなくなった技術にも焦点を当て、その再利用や活用の可能性を探るとともに、なぜ廃れてしまったのか、どんな資源が使われていたのか、そしてリサイクルにまつわる希望や文化的な意味についても考察を深めている。こうした実践は、滞在制作やワークショップの開催、パフォーマンスや展示を通じて展開している。とくに、芸術に触れる機会が限られている人々と関わることに大きな喜びを感じている。そのプロセスの中で生まれる文化的交流こそが、自身にとっても大きな学びと成長につながっている。



©Simon Whetham

市民参加のかたち

材料提供／制作参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉駅周辺エリア／第二山崎ビル ※調整中

スローアートコレクティブの作品は、つねにその場所と対話して、既存の街や建築空間と共生する形で竹やパイプなどで可変的な仮設体を設置し、そこを街の人々が集まる場所にすることを目指している。ひもという自由な素材を各々が竹に編み込んだり、結んだりしてだんだんと大きな編み物建築ができてくる。また風や太陽の力を活かした装置と組み合わせながら、街の音や風を見たり聞いたりできるしかけも組み込む。常に即興性を重視して日常素材を使いながら、異次元的な非日常空間を創り出していく。

「スローアート」は地域社会とのつながりのなかで共に作り、遊ぶことで、作品になっていく。それは、どこの場所でどんな人たちと実践されるかで結果は日々変容するものでもある。本プロジェクトでは、千葉の地域と連携し、千葉国際芸術祭2025の理念と共鳴しながら、新たな創造と出会いの喜びの場を千葉市の中に創出させるプロジェクトを展開する。



Photo: Tobias Titz

●Profile：スロー・アート・コレクティブ Slow Art Collective

オーストラリア、メルボルン在住の加藤チャコとディラン・マートルが主宰するアートコレクティブ。

2009年より、環境の持続可能性、日常的な素材の倫理、DIY文化、そしてコラボレーションの意味の探求に焦点を当て、観客とともに完成させていくアートを展開している。コミュニティ、環境、自然、街、遊び、素材、コラボレーションを大切に、それがゆっくりと社会の中に浸透し成長していくようなアート活動のあり方を模索している。

主な活動、サンフランシスコ エクスプロラトリウム美術館、東京ビエンナーレ、Mパビリオン、タラワラ美術館、イプスウィッチ美術館、ブリスベン美術館、ベイサイド美術館、ヌーサ美術館、マックレランド野外彫刻美術館、モーントン半島美術館、シドニーパワーハウスミュージアム、ビクトリア国立美術館、ガートルード・コンテンポラリー、シンガポールのエスプラネードセンター、その他地域の学校、アートフェスティバル、ショッピングセンターなど多岐にわたる場所で制作活動を展開している。

市民参加のかたち

ワークショップ参加／制作参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉県こども病院など ※調整中

千葉市内の公共空間を巡回する仮設の黒板を使い、市民との対話や関わりを生み出す参加型のインスタレーションを展開する。人々が自身の「うまくいかなかった出来事」を共有し、それを他者への励ましの言葉に変えることで、困難な状況にある人々に前向きなエネルギーを届けることを目指している。直径5メートルの環状黒板は、手を取り合い肩を並べて立つ姿から着想を得た曲線的な形状をしており、サポートと団結の象徴でもある。展示期間中、市民はカラフルなチョークを使って黒板にメッセージや絵を描き、互いにあたたかい励ましの言葉を交わすことができる。

本プロジェクトは、現代の情報過多の時代において深刻化する社会的圧力やメンタルヘルスの問題に回答するものである。特にパンデミック以降、ソーシャルメディア上では他者の「輝かしい瞬間」が強調され、それとの比較が人々の不安感を引き起こす傾向が強まっている。そうした状況のなかで、本プロジェクトは公共空間において、あたたかく軽やかな方法で「大丈夫、あなたはすでに十分頑張っている。そのままでいこう」といったメッセージを、困難や批判に直面している人々に届けていく。千葉国際芸術祭2025の「ソーシャルダイブ」に呼応し、本プロジェクトは市民とアートとの距離を縮めることを意図している。環状黒板は市民の創作を促し、その参加によって初めて完成する作品である。



©ZHANG Jie

●Profile : 張婕 (ReBuild Lab) Zhang Jie

1994年、中国・厦門生まれ。香港大学大学院建築学専攻修了。現在は上海を拠点に活動している。日常の空間に着目し、その再編・再構築を芸術実践の軸としている。仮設的なインスタレーションや空間への介入を主な表現手段とし、空間スタジオ「ReBuild Lab」を立ち上げた。

「ReBuild Lab」としては、「Hello, Islands」(中国・2023)で優秀賞を受賞。「Reuse Italy」(イタリア・2023)、タリンアーキテクチャ ビエンナーレ (エストニア・2022)で特別賞、「Ann Arbor Alley Project」(アメリカ・2021)でショートリスト選出、「Bubble Futures」(イギリス・2020)で第1位、「Archism」(インド・2019)で第2位を獲得するなど、国際コンペティションで数々の実績を残している。

また、アーティスト・イン・レジデンスとして「Promised Land Art Festival」(中国・2024)、「潮間帯芸術村」(中国・2025)に参加。

市民参加のかたち

制作参加／展示鑑賞

実施エリア・拠点

千葉市内各所

天馬船プロジェクトは、木造和船を模した長さ約30cmの「ミニ天馬船」をたくさん川に浮かべ、水の流れにまかせて進む天馬船の風景を楽しむイベントを開催するアートプロジェクト。

〈水辺の文化・空間を横串にする横断的な取り組み〉

本プロジェクトを通じて、アート・まちづくり・環境再生などのジャンルを越え、アーティスト・学生・市民・企業などが連携することで、新旧の水辺ユーザを横断的にネットワークしていくことを目指す。

〈日常生活の中に水辺との関係を再構築する〉

催事的な一時の盛り上がりには留めず、歴史的なイメージを背景に、地域との連携を図りながら、日常生活での水辺利用につながるような関係性を構築していく。

〈空間社会ストックを活用したコミュニティの形成〉

地域の記憶や時間が刻まれた場所や空間を再活用することで、地域のアイデンティティを次代へとつないでいく。

〈ドネーション型の開催形式〉

集まった資金を川辺の活性化・浄化活動に役立てる。花見川においては、より親しみのある水辺づくりをめざして、桜の植樹をする予定。市民の主体性・協働性を高め、持続的なイベントとして定着していくことを目指す。

〈市民創造文化活動支援として〉

立場や年齢、ジェンダー、国籍の違いを越えて参加でき、レース全体が参加する市民の多様性と連帯をあらわし、市民創造文化活動となることを目指す。また、河川＝表現するためのメディアと捉え、世界に向けたコミュニティ・アートの取り組みとして発信する。



市民参加のかたち

ドネーション／作品制作／イベント運営／イベント観覧

実施エリア・拠点

花見川、花見川団地商店街

●協力：ミズベリング花見川、花見川団地商店街振興組合、畑町子ども食堂

〈タイムラグ・パーク〉

国道357号線の地下立体化に伴ってできた上部空間に、コンピューターバグを起こしたようなオブジェを設置し、スケーターが技を決める。コンピューターバグは、一種の電磁信号の遅れ＝タイムラグである。それらのオブジェ群の中でスケートボーダーがアクロバティックな技を決める瞬間、その空間には時間的・空間的・文化的なバグが立ち現れる。

〈まちをひらくみち〉

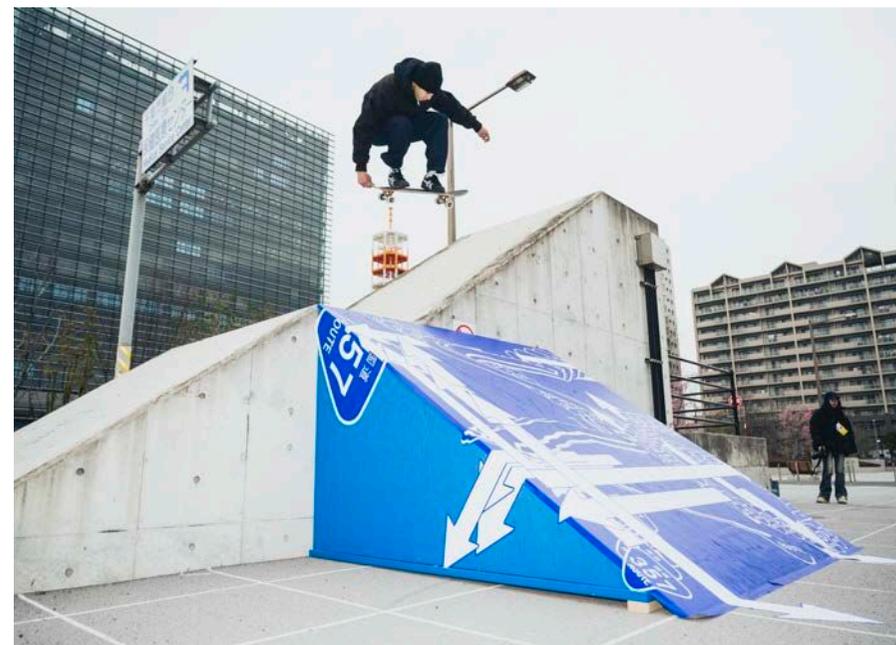
1970年代初頭、日本にスケートボードが輸入されたころから千葉にはスケーターがいて、彼らのコミュニティ文化は制度的コミュニティとは質を異とする文化を醸成している。スケートボードをはじめとするストリート文化は、常に少年少女の憧れとして存在し、現在まで連綿とつながっている反面、安全性や美観等の観点から公共空間では規制されることの多いことも事実である。

このプロジェクトでは、道路での規制対象として象徴的なスケートボードや壁画を、スケートボーダーだけでない市民同士で共に楽しみ、公共の場をどうシェアしていくのか共に考えることを目的としている。

この街の許容性を少しだけ押し広げ、公共の場のシェアについて考えるきっかけになることを目指す。

【実施プログラム例】

- ・プロスケーターによるデモンストレーション
- ・スケボー体験ワークショップ
- ・壁画ワークショップ
- ・トークイベントなど



撮影 ただ（ゆかい）

市民参加のかたち

イベント参加／パフォーマンス参加

実施エリア・拠点

千葉市役所周辺エリア／国道357号上部空間 ※調整中

千葉市に暮らす・働く・学ぶすべての人々が作品出品できる展覧会を2025年9月～11月に開催するプロジェクト。出展にあたっては作品審査は設けず、応募要項に叶うものであれば、絵画、彫刻、写真、演劇、書道など、ジャンルや形式を問わずに展示できる。本企画をきっかけに、誰しもが自分の表現を大切に、地域の中で創造性を発揮し、アートを通して「自由」を手にできるまちづくりにつなげることを目指す。

2024年度のプレ会期では、「先生たちのアートアンデパンダン展」として、教育の現場や講師などの仕事に関わってきた「先生」(OB/OG含む)を対象に開催し、56名(組)による159点の作品が展示された。2025年の本会期では、その理念をさらに拡張し、年齢や国籍を問わず、千葉市全市民(在住・在勤・在学)が参加できるプロジェクトとして、ひろく作品を公募する。

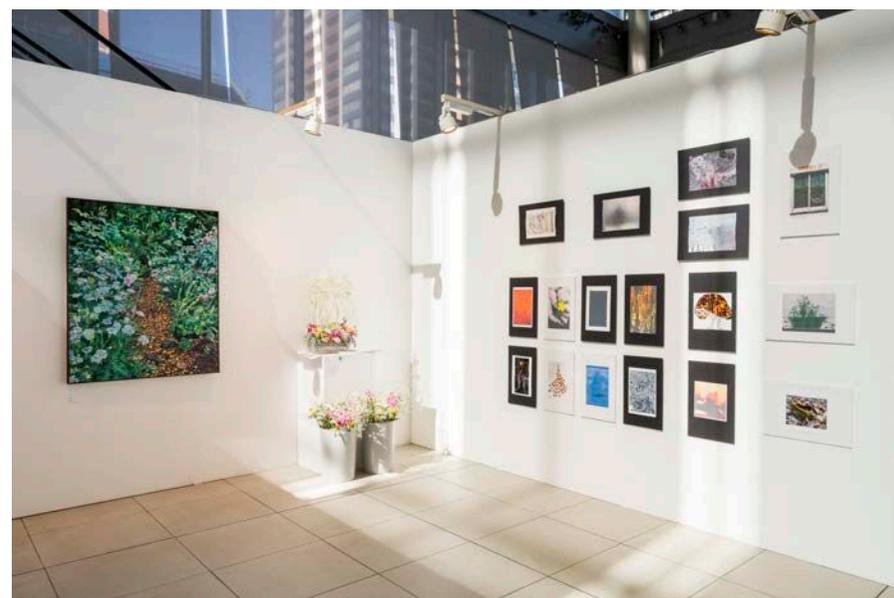
多様な背景や視点をもつ参加者の作品が一堂に会することで、市民同士に新たなつながりが生まれることにも期待したい。

市民参加のかたち

作品出品／作品鑑賞

実施エリア・拠点

千葉市役所周辺エリア／千葉市役所ほか



「ちくわ部」は、千葉市にゆかりのある人々が、芸術祭を“口実”に出会い、対話を通じてつながること・自分たちの暮らしを考えることを目的とした対話型ワークショップイベントです。名称には、「千葉市で」「企て（くわだて）」「輪になって話す」という意味を込めています。

本企画は、文化芸術やまちのことに関心のある方はもちろん、「芸術祭」が自分の生活から遠く感じられる方にもひらかれ、所属や肩書にとらわれず多様な市民が集える場を目指します。外部ゲストの話をきっかけにしながら、参加者同士が身近な話題や社会的なテーマについて語り合い、それぞれの暮らしの楽しさや心地よさを、共に考える機会とします。

また、対話のプロセスを通じて、千葉市内で芸術祭を共につくる仲間を育み、地域にゆるやかなつながりを育てていきます。

市民参加のかたち

ワークショップ参加

実施エリア・拠点

市場町・亥鼻エリア／アーツうなぎなど

